

山本沙姫

表紙イラスト：舞猫ルル

ぜったいおんかん

絶対音感

綾香、淫欲のセラナーデ

試し読み版

二次元ぶち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『絶対音姦 綾香、淫欲のセレナーデ』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



ぜったいおんかん

# 絶対音女

綾香、淫欲のセレナーデ

山本沙姫

表紙 / 舞猫ルル

## 登場人物紹介

### Characters

---

みやの もりあやか

#### 宮野森綾香

世界的なフルート奏者を母に持つお嬢様。絶対音感を持ち、フルート奏者として将来を有望視されている。

みやの もりまり

#### 宮野森真理

綾香の姉。天才である綾香に引けを取らないフルートの演奏者。

#### 調教師

綾香をさらって陵辱した大男。

(……まさか、あんな失敗をしてしまうなんて……)

わずか四歳の時に児童音楽コンクールで優勝して以来、数々の大会で常にその腕前を賞賛されてきた天才フルーティスト少女、宮野森綾香。

草原を駆け抜けるそよ風のように清々しく、そして心落ち着かせる爽やかな音色で多くの人を魅了してきた彼女にとつて、今日の晴れ舞台で披露した演奏は、自分でも信じられないほど不出来なものであった。

(ずっと……ずっと練習してきたのに……今日のために……)

わけあって必ずしも心身共に万全とは言えない状態で参加したものの、優勝するだけの自信はあった。にもかかわらず、結果は最下位。他の出場者がすべて出ていった後も一人で控え室に残り、イスに腰かけて納得がいかない自分自身に問いかけ続ける。

膝の上に載せた愛用の黄金色に輝くフルートを強く握り締め、背中まで届くサラサラの黒髪が床についてしまいうるさく、深く頭を垂れる姿が痛々しい。まだあどけなさの残るふつくらとした桃色の頬を、一筋の涙が伝い落ちていく。

「クスン……」

軽く鼻を吸ると、身の丈一六〇センチ弱の華奢な身体をフルフルと小刻みに震わせる。悲しみに打ちひしがれるその姿は、まるで雨に打たれて道端で震える弱々しい捨て猫のよう。

スリムな肉体を包み込むのは、道行く人が見れば必ず振り返ると言われるセレブなお嬢様校の制服。白のワイシャツに赤と茶のチェック柄のミニスカート、それに薄い黄土色をしたベストという清楚な組みあわせが、悩める少女が醸し出す儂い美しさをさらに引き立てる。

(こんな結果じゃ、お母様みたいになるなんて……無理……)

薄手の上着を軽く隆起させる、かろうじてBカップに届くかどうかの釣鐘型の美しい乳房の奥底が、悔しさと悲しさで張り裂けんばかりにキリキリと痛む。

今回綾香が挑んだのは、数多くの優秀なプロ奏者を輩出している登竜門とも呼ぶべき栄誉ある音楽コンクール、麗音祭<sup>れいおんさい</sup>。幼い頃から一日たりと休まず練習を続けてきた彼女だが、この大一番に出場が決まって以来の四ヶ月は、特に気合いを入れて腕を磨いてきていた。なぜなら、母にして世界的に有名なフルート奏者である宮野森聡子<sup>さとこ</sup>が若い頃に出場して優勝し、世にその名を知られるきっかけとなった特別なものだから。

(わたしには、まだ無理だったの？ でも……他の曲で優勝しても……)

演目を選んだのは、聡子が優勝した時と同じ「蒼き月のセレナーデ」という繊細な指使いとリズム感覚を要する、ゆったりとした流れの独奏曲。難易度はかなり高い。

しかし物心ついた頃から母に憧れ、いつかは乗り越えたいと願ってきたフルーティスト少女にとっては、決して外す事のできない大きな試練。これを選んだ事自体は間違っていない。

なかつたと思つてゐる。

(……会場の人達、みんな呆れてしまつたかしら……)

宮野森聡子の娘が彼女を世に送り出した大舞台で同じ曲を演奏するという事に、聴衆の誰もが大きな期待を寄せているであらう事は想像がついていた。その期待に応えるべく、綾香は持てる力のすべてを注いで本番に挑む。

(吹き始めは完璧だつたわ。でも……)

澄みきつた音色と寸分違わぬリズムで、月夜の神秘的な雰囲気を見事なまでに表現した順調な滑り出し。広い公会堂にいる誰もが物音一つ立てず、母親譲りの腕前と日々の弛まぬ努力の結晶に聞き惚れる。

しかし彼女の演奏が人々を惹きつけたのは、血筋や修練のためばかりではない。

絶対音感。すなわち、ありとあらゆる音をド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ド、の音階で認識できる特別な感覚。この持つて産まれた特別な才能のおかげで、綾香は音程を外す事なく正確な演奏ができるのであつた。

だが曲が進み、中盤のド・ミ・ファをゆつくりと繰り返すパートの途中で身体が硬直し、一瞬戸惑うように指が止まつてしまふ。以後も何度か登場するこの旋律だけが、どうしてもうまく吹けない。

(なぜ、今日に限つて……)

普段は内気で控えめな性格ながら、幼い頃からフルートを吹く時だけは大勢の人前でも物怖じする事ない度胸の持ち主である彼女でも、今回のように大きな大会では緊張する事はある。とはいえプロを目指しているだけあって、それでしくじる事など未だかつてない。無論、今日までの練習で失敗した事も。

コンコン……。

色々と考え込んでいると、不意に小さな耳を軽いノック音で優しくくすぐられた。

「……あ、は、はい……どうぞ……」

慌てて涙をハンカチで拭い、来訪者を招き入れる。

カチャ……。

「失礼します。宮野森綾香様。先ほど事務所に宮野森様のファンとおっしゃる方が見えられました。これを渡して欲しいと……」

静かに扉が開き、中に入ってきたのは青いスーツに身を包んだ小柄な中年の女性。この公会堂の職員らしい。物腰柔らかな口調で話しかけながら、一抱えもあるほどの大きな花束を丁寧に手渡す。

「あ、ありがとうございます。わざわざ届けていただきです」

白い紙に包まれた、赤白黄色のバラの花。宝石のような花卉の輝きが目に眩しい。失敗の悔しさで凍てついた心を覆う暗い闇を、はるか彼方へ振り払いそうなほどに。

「でも……ファンの方って、どんな人でした？」

「とても背が高い男性でしたよ。あ、そうそう。失敗にめげずにまた素晴らしい演奏を聴かせて下さい。って、伝えて欲しいって言われていました。お優しい方ですね」

姿も見せずに思いがけない贈り物をしてくれたのが誰なのか、気になり尋ねると女性事務員は少しいたずらっぽい笑みを浮かべながら、優しく答えてくれる。

「お、男の方、ですか……」

彼女の言葉を耳にした途端、綾香はポツと頬を朱に染めた。

何しろ彼女は、悪い虫がつかないようにと幼稚園の頃からずっと女の子だけの学び舎に通わされている、言わば典型的な箱入り娘。おまけに内気で家族以外の異性とはろくに話もできない性格とあっては、自分に好意を持っている男性がいると知れば顔から火を噴くのも無理はない。

「ふふふつ。では、失礼します」

戸惑うウブな少女をからかうように手で口元を隠して微笑むと、女性事務員は一礼して静かに去っていく。再び一人になった少女の胸の中に、暖かいものが広がっていった。

（……そうよ。応援してくれる人がいるんだから、いつまでも落ち込んでいられない。次はがんばらなくちゃ……）

ついさつきまでの悲しみを忘れ、元気を取り戻した綾香は花に顔を埋めて大きく息を吸

い込む。

(……んー、いい香り……あら？ コレは？)

爽やかな香りに酔いしれていると、丁度目の前の位置にあるものが差し込まれているのを見つけた。「親愛なる麗しきフルーティスト様へ」と書かれた、横開きの白い封筒。表にも裏にも差出人の名はなく、ただの手紙にしては少々分厚い。

(ファンレター？ やだ、男の人からお手紙、もらっちゃうなんて……)

初めて異性から贈られた便りに軽いきめきを覚えつつ、彼女は細くしなやかな指で封を切り、中から四つ折にされた便箋を取り出して開く。

「え!？」

『キミに話したい事がある、ここまで来たまえ。この写真を大勢の人に拝ませたくなければな』

黒く大きな瞳に、青いインクで綴られた奇妙な一文が目飛び込んできた。命令調の文面は妙に角ばった書体とあいまって、きつい口調で言われているような威圧感を覚える。さらに文章の下には、手描きの簡素な地図が添えられていた。

(話？ それに写真って……何の……)

漠然と湧き立つ不安感に胸の鼓動が激しくなるのを感じながら、綾香は封筒から残りをすべて取り出す。そしてランプでババ抜きをする時のように、扇形に広げてみた。

「！こ、これって!!」

その瞬間、落雷の如き衝撃が全身を駆け抜け、震える桜色の唇から思わず上擦った驚愕の声漏れる。同封されていたのは、一糸纏わぬあられもない少女の姿をとらえた十数枚の写真だった。

あるものはパイプベッドに括りつけられ、大きく広げられた股の間に極太の男根を押し込められて苦痛に顔を歪める様子を写し、またあるものは、天井から吊り下げられて剥き出しの尻を鞭打たれ泣き叫ぶ姿。どれもこれも、か弱い娘を罵る陰惨なものばかり。

そしてそこに写し出されているのは、まぎれもなく自分自身。

(こ、これって……あの時の……そ、それじゃあ、この花束を持ってきたのは……)

コンクールに打ち込むため考えないようにしてきた、四日前に我が身を襲った悲劇の記憶が脳裏に甦り、華奢な身体がガクガクと震えた。背筋にジツトリと汗が滲み、喉が焼けるように渴いていく。

(もう、終わったと思っていたのに……)

その日は母の知人である著名な音楽家の自宅を訪れての、週に一度のレッスン日。本来ならリムジンで送り迎えしてもらおうとろだがあいにく故障してしまい、慣れない電車での訪問となった以外は特に変わった事のない一日、になるはずだった。

目の前でそそり立ち、女として命の次に大切なものを奪わんと狙いを定める醜悪な物体はまるで凶暴なコブラのよう。エラが大きく開いた亀頭は亀と言うよりは蛇の頭に見え、先端から滴り落ちる透明な粘液は、囚われの少女にとつては毒液にも等しい。

『ふふふ、よく見ておけよ。女になる、瞬間だ……』

恐怖のあまり指一本動かさないほど全身が凍りつく綾香は、まさに大蛇に追いつめられた子ウサギ。抵抗する手段をまったく待たぬか弱い獲物に死刑宣告にも似た残酷な言葉を投げかけると、男は柔らかな肉体の上のしかかってくる。

ヌメヌメと妖しく輝く肉槍の突端が、乙女の最後の砦に突き当たった。

『ふんっ！』

ギニチュウツ！

『ひいっ！ いっ、いやあああああ——つつっ！』

陰毛に火が点いたかと錯覚するほどの熱さを感じた次の瞬間、股間から脳天に向けて激痛が一気に駆け抜ける。肉欲の塊で抉じ開けられたクレヴァスから、処女の証が垂れ落ちるぬめりのある感覚と共に。

『くんっ、んんっ、んっ、さ、さすが初物は……きつい……でも、この締めつけ……たまらないぜ』

グジュツ！ズリュツズリュツズリュツ……。

両手を頭の脇について腕立て伏せのように曲げ伸ばししながら、腹上の略奪者はガチガチに固まった己が分身を狭い産道の中へ押し込んでいく。少し進めては引き、引いては強引に押し込むという、緩急つけての乙女の肉体への侵略が始まった。

頭の上で響くハアハアという荒い息と擦れた声が無神経に耳の奥を引っ掻き回し、うなじから背筋に駆けて寒気が走る。

『い、痛い、痛い……やめ、てっ！　い、入れないでえっ！　そんな、あつ、あうつ、抜いてえーっ！』

身を裂く強烈な痛みから逃れたい一心で、綾香は長い髪を振り乱し涙の粒を飛ばしながら悲鳴を上げる。だがいくら叫んでも、悲痛な願いは目の前に迫る悪漢には届かない。

『ああ、言われなくても、抜いてやるよ。お嬢さんのキツキツなマ○コでな』

横たわる少女がその肉体を蹂躪される苦しみに喘ぐ一方で、のしかかる男は己が分身にペタペタと纏わりつく女唇の感触を味わいつつ、下品なジョークを囁きながら腰を前へ突き出していく。

張り詰めた表皮にジットリと熱さと湿り気が染み込み、中を走る神経を震わせる気持ちよさが掻き立てる邪な欲望は留まるところを知らず、より大きな快感を求めて乙女の腔内に潜り込んでいった。

ブジュッ！

『ひぐっ！ お、お腹が……』

やがて綾香は、股間にタワシで擦られるようなこそばゆい感触を覚える。胎内いっぱい、燃え盛る松明を突っ込まれたような熱さも。ついに卑劣な強姦魔の男根は、互いの下腹部が密着するほど乙女の膣内に入り込んでしまった。

産道の肉壁にピタリと張りつくペニスの表皮が、ビクビクと脈打ち邪な男の興奮をいやがおうにも伝えてくる。

(わたし……壊された……こんな人に……)

『よっ、よーし……全部入ったぞ。さて』

身も心もズタズタにされ、茫然自失のお嬢様に構わず男はゆっくりと両腕を突っ張って身体を浮かせ、粘液まみれの肉棒を引き抜いていく。そして亀頭のエラが女穴から抜けかかるまで来たところで、再び一気に根元まで押し込む。乱暴な淫欲のピストン運動が始まった。

ニチャニチュツ、ヌブツネブツ……。

『うあつ！ あつ、あああーつつつ、うつ、動かない、でえ……だめえ！』

悲しさを纏った粘り気のある調べが、股間から鳴り響く。激しい痛みと、秘唇をドロドロに溶かしてしまいそうなぐらいの熱さという、絶望感を盛り上げる伴奏を添えて。

『くふうつ、か、可愛いぜ、その顔……それに、んつつ……その、音……』

恥辱に顔を真っ赤に染めて泣き叫ぶお嬢様の姿に興奮して、邪悪な演奏家が振るう肉の尺八の動きは徐々に大きくなっていく。腰を前後に動かすばかりではなく、左右に捻ったり尻で大きく円を描くように振ったりと、突き込んだペニスをヴァギナの中で好き勝手に暴れさせる。

ぐちゅぐちゅぐつちゅぐつちゅ……。

『ひぎいつ！ あつ、ああ————つつつつ！ お、お腹が……お腹が、ヘンになつちゃう……んつ、あうつ！』

未熟な肉のトンネルの内壁を、大きく開いたペニスのエラがゴリゴリと擦っていく。自分の指では届かない、肉体の奥底まで。

『ど、どうだ……初めての感想は？ き、気持ち……いいだろう……』

『い、嫌……もう、許して……あ……』

腹上で激しく腰を振りながら厭らしい質問をぶつけてくる大男に抗うものの、綾香は無理矢理肉棒を捻じ込まれるヴァギナの中に、痛みや熱さとは異なる感覚がある事に不意に気付いてしまう。

(な、何……この感触……)

股間が張り裂けるかと思うほど激しい破瓜の痛みが渦巻く中から、時折浮き沈みする痺れるような微かな心地よさが湧き立つ。そして異物を押し込まれて、妊娠初期のように微

かに膨らんだ汗まみれの下腹部の奥底から身体中にジンワリと広がっていく。

(ち、違う……こんな……)

レッスン疲れなどでストレスが溜まった時、つい解消したいあまり敏感な秘所を指で慰める時に湧き立つ感覚と似たそれは、本来なら愛しあう男女の営みがもたらす快感。しかし、見知らぬ男の欲望のはけ口にされている状態で感じるなど、到底認められない。

必死に否定しようとする少女をあざ笑うかの如く、肉体の奥底で目覚め始めた快樂はズブズブと燻り続ける。振り払う事のできない我が身がもどかしい。

『ふふっ、い、嫌がつている……んっ、フリして、ヒダヒダを、絡みつけてくるじゃないか……んっ、い、いいん、だろう……』

戸惑う綾香の耳元に頬を押しつけて、荒い息を吐きながら男は蔑んだ言葉を囁きかける。まるでこちらの心の中を見透かしているかのように。

『いやあ……い、言わない、でえ……そんな事……ない、あっ、あんっ!!』

肉体だけでは飽きたらず、卑猥な言葉の刃で心まで責め立てられる。耳を塞ぎたくても縛られてはどのようにもならず、はりつけ少女は恥ずかしさに身を振りながら泣き叫ぶ事しかできない。

当然、指を入れられた時と同様に身体の動きに釣られて、ヴァギナの中を征服する巨大な肉棒も大きく捻られる。

『くう……この嘘つき娘め、こんなにぬるぬるさせて、腰を振って……も、もう……出さうだぜ！』

少女の肉壺に突き立てた雄蕊をビクビクと痙攣させつつ、男は上擦った声で呼びかけた。きつく締めつけられたペニスは、もはやいつ爆発してもおかしくない。

ギシギシギシギシ……。

ぬぶつねぶつぬぶぬぶぬぶぶつつつ……。

激しく揺れるベッドのスプリングが上げる悲鳴と、秘所同士が擦れあう粘り気のある淫音が、コンクリートの壁を越えて外まで響きそうなほど高鳴る。

『そつ、それは……それだけはいやああああ——つつ！ぬつ、抜いて、抜いてえつ！』

いよいよ迫る望まぬ受精。綾香はなりふり構わず身体を揺らして懸命に逃れようとした。しかし儂い抵抗を試みるか弱い少女に、あまりに過酷な運命の時が訪れる。

『だめだ、だつ、出してやる……お前の中に、たつぷり入れてやるうつ！』

『いやっ！そ、そんなのいやああああ——つつつつつ！』

ブルルルルルツツツ！ ビジューツツツツ……。

悲痛な叫びも空しく、ついに誘拐犯はブルブルと震わせた肉の巨砲から熱きスペルマを炸裂させた。白い淫欲の散弾が、子宮まで届きそうな勢いでヴァギナの中を駆け上っていく。

『あ……ああ……』

下腹部の中に、熱い液体が広がっていく。受け入れがたい子種で肉体の奥底まで完全に汚されたショックで気が遠くなつていく彼女の耳に、容赦ない悪魔の囁きが聞こえてきた。『ふう……仕事でこれほどの上玉を好きにできるなんて、俺は運がいいぜ。もつともつと刻み込んでやる。その身体に、男に犯される悦びつて奴をな……』

散々肉体を弄ばれた後、またもや意識を失つた綾香は気が付くと駅のベンチに座り込んでいた。不思議と手足の縄の跡や身体の痛みはなかったが、今までの出来事が決して夢ではなかったのはわかる。心の奥底には、激しく肉体を汚された忌まわしい感覚がこびりついているのだから。

（このまま黙っていれば、わたしが我慢すれば、もう何も無いと思っていたのに……）

しかし心優しい少女は、家族や親しい人に余計な心配をかけたくない思いからその身に背負った辛さや悲しみを、すべて小さな胸の中にしまい込む。そして事件を忘れてコンクールに集中するため、この四日間は今までよりもさらに練習に集中し続けてきた。

幸い何事もなく今日を迎えられただけに、ここにきての不意打ちのショックは大きい。（でもなんで、今になって呼び出すなんて……また、あんな事を……）

誰かに助けを求めたい思いと、誰にも心配をかけたくない思い、相反する二つの気持ちが頭の中をぐるぐるど駆け巡る。耳に纏わりつく、湿った肉同士が擦れあう陵辱の淫音を

BGMにして。

ぐちゃぐちゃぐちゅぐちよぐちよぐちゅぐちよぐちよ……。

(……！　そう言えば、わたしが失敗したところって……みんな同じ……もしかして、それが……)

不意に今日の演奏中に失敗した時の様子が、頭の中をよぎった。ド・ミ・ファをゆつくりと繰り返す旋律。それは処女を奪われたあの時、己が肉体で無理矢理奏でさせられた淫らな調べと同じ。

偶然にも演奏した曲と一致した音階とテンポに、無意識に身体が拒絶反応を示して演奏が止まってしまったのかもしれないと気付く。

(でも、練習していた時には何も……あっ！)

ところが原因の一端が垣間見えた途端に、股間が熱湯を浴びせられたかのように熱くなる。下腹部にジワジワと広がる、尿意に似た痺れる感覚を織り交せて。

(まさか、この感じは……)

嫌な予感が走り、恐る恐る短いスカートを太腿の上まで捲りあげた彼女は我が身に起きている驚くべき変化を目の当たりにする。薄手の白いショーツが透けるほど秘所が湿り気を帯び、下に覆い隠された黒い若芝が微かに顔を覗かせているという信じがたい肉体の反応。

しかも肉割れの奥でつぶらなクリトリスが充血して、愛撫を誘うようにヒクヒクと震えているのまではつきりとわかった。

(嘘よ……こんなの。なんで……)

また誰か来るかもしれない公共の場所で、突如身体の疼きを鎮めなくなる衝動に襲われて、生真面目な少女はどうしていいかわからず戸惑うばかり。心でいくら否定しても肉体は突如として湧き上がる淫欲を抑えきれず、枯れ野に燃え広がる野火の如き勢いで、全身に広がっていく。

「だめよ、堪えなくちゃ……んんっ……」

両手を太腿で挟む姿勢で股を固く閉ざし、なんとか興奮が収まるまで耐え忍ぼうと抵抗を試みるものの、一度火照った身体は言う事を聞かず秘肉の奥底が激しく痺れていく。痺攣するクレヴァスから、恥蜜にまみれた真紅の肉の花弁がはみ出し始めているのが感じ取れた。

(でも、我慢……できない……嫌、こんなの……)

磁石に集まる砂鉄のように、腿に挟んだ手の平が股間へ向けて引き寄せられていく。このまま疼く秘肉を思うまま弄り回して、切ない思いを鎮めたい。

しかしここは、大事な音楽コンクールを終えたばかりの舞台裏。プロ奏者を志す者としては神聖な場所と言っても過言ではないところで、淫らな思いに耽るなど許されない。

しかしか弱いフルート奏者は抗いきれず、身も心も徐々に肉欲の淵へとまっけていく。もがけばもがくほど出られなくなる、アリ地獄にはまったアリのように。

(も、もう……だめえ……)

くちゅっ……。

「んっ！」

とうとう堪えきれなくなった綾香は、下着の中へ手を伸ばしてしまった。細くしなやかな指先に、生暖かい粘液を纏った柔毛がチクチクと触れるくすぐったい感触が走る。

(やだ、こんなに……)

肉壺が淫らに濡れそぼっているのをあらためて実感した彼女の中で、心の枷が弾け飛んだ。

ぬちゅっ、ぬちゅっぬちゅぬちゅぬちゅ……。

フルートを吹く時と同じ繊細な指使いで、みずからド・ミ・ファの音色を奏で始める。火照ったか細い身体を、ビクビクと小刻みに痙攣させながら。

「はっ、はうつんっ、あ……あうんっ！　いつ、いい……でも……」

長い髪がバサバサになるほど激しく頭を振り乱し、半開きの口から生暖かい桃色の吐息が漏れる。薄いカーテンから差し込む西日を浴びて、茜色に染まる顔が興奮と恥ずかしさにますます赤みを帯びていく。

カチツ！

ヴィイイイイ——…………ズジュプジュプジュプ…………。

「あつ、ああんつ……このブルブル……いいーつつつ！」

膣内に打ち込まれた軟体が蠢き、敏感な秘所を激しくかき回す甘美な衝撃に身を振りながら喘ぐ美貌のお嬢様を満足げに見下ろしつつ、ご主人様は背後に回り込む。

そしてパイプの振動に釣られて、フルフルと震える柔らかかなでん部を軽く撫でた。

「ひゃあんつ！ もつ、もう……焦らさないでえ……」

敏感な柔肌を触られるくすぐったさに全身をビクンと痙攣させ、短い悲鳴を上げた綾香は傍らの壁に掛けられた乗馬鞭に視線を向ける。

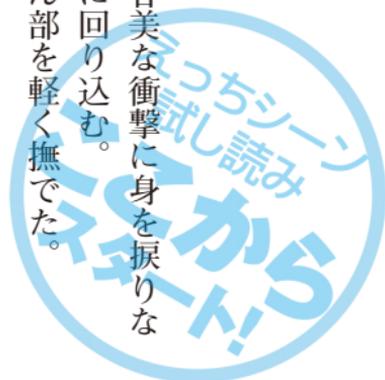
「今日は、新しい快感を教えてあげよう」

目でスパニングをねだる彼女を無視して、彼が手にしたのは小さなガラス瓶。その中身を、剥き出しの尻溝にトロトロと垂らす。

「ひゃあつ！ な、何……冷たい……」

氷水とは違う粘り気のある液体が、固く窄まった肉の菊花にネチヨネチヨと粘り気のある水音を立てながら塗り広げられていく。

「こつちに入れてやるんだよ。初めてだから、こいつを塗ってよく解ほぐしておかないとな」  
双曲の谷間に垂らされたのは、滑りをよくするためのローションだった。粘液の冷たさ



と太い指で弄られるくすぐったさに大きな桃尻がますます大きく震え、閉ざされた肛門がパクパクと開閉してしまう。

「ええっ！　だっ、だつてそこは……汚い……だっ、だめえ！」

人体の最も汚れる部位に今にも漏らしてしまいそうなジクジクした痺れを感じ、恥ずかしさのあまり裏返った声で綾香は叫ぶ。しかし調教師の指は止まらない。菊座の表面ばかりか、その中心を貫いて内側にまで、粘液が塗り広げられていく。

ぐにぢゅっ、ぐにぐにぐにゅっ……。

「ひっ、ヒィッ！」

直腸の中に蠢く異物が押し込まれ、内側からくすぐられる奇妙な感覚が大きくなでん部を静電気のようにビリビリと駆け抜け、思わず背筋を反らして叫ぶ。さらに糸電話で繋がっているかと思えるほどの痺れが、尻溝を伝わって股間まで突き抜けた。

「あぁんっ！　お、お尻弄られるの……はずかし、いっ。でも、でも……ジンジンして、いいのお……」

汗ばむ喉を震わせて、ボンデージ姿のお嬢様は躊躇う事なくはしたない叫びを上げる。乙女の急所に襲いかかる快感の波に、抗う術も必要もない。

「いい頃合だな。さて……もつといいモノをくれてやる、よっ！」

ググッ……グリユグリユグリュツ……。

擦れた声で呼びかけられた瞬間、肛門に極太の松明でも突っ込まれたかのような熱さと拡張感が広がる。産まれて以来ずっと排泄にしか使われなかった肉穴に、初めて男性器が突き込まれた。

ずりゆずりゆつ、ぐじゆぐじゆぐじゆ……。

「ひっ！ ひいいいっつっ！ お、お尻が、お尻が破けちゃう。焼けちゃうっ！ あんっ！  
そんなに強くしちゃ、だめえーっつっ！」

「おやおや、こっちは自分の指で弄った事もないようだな。でも、慣れればマ○コと同じぐらい、突っ込まれるのが気持ちよくなれるぜ」

柔らかなヒップを指が食い込むほど強く掴み、調教師は激しく腰を振る。キチキチに直腸に詰まった極太のペニスが素早く行き来して、大きく開いたエラで肉壁をコリコリと擦ると、そこからジンワリと心地いい熱さが染み出していく。

「ああっ、こ、こんなに……お尻も、あそこも、コリコリされるのが……いつ、いいなんて……あつ、あんっ！」

二つの肉穴に打ち込まれた軟体が蠢き、薄い腹膜越しにぶつかりあう衝撃が少女の未熟な肉体を内側から激しく責め立てる。その強烈な刺激に耐えきれず、彼女は身を縛る荒縄を引き千切らなばかりに全身をくねらせる。

淫欲に憑かれたお嬢様の淫らな甘い喘ぎ声が木霊する殺風景な監禁部屋に、甘酸っぱい

ラヴ・ジュースの香りが充満していく。

プピッ、プップピピピピッ……。

「はうんっ！ な、何……？」

やがて汗と腸液で滑りがよくなった肉棒のピストン運動が早まるにつれて、赤く火照った桃尻から奇妙な音が鳴り響くようになってきた。

ミソ・ミソ・ミソ・ミソと、断片的に奏でられる放屁に似たはしたない調べ。ゼリーと同じぐらいの柔らかさを誇るでん部が男の固い腹筋で押されるたびに、尻溝の中を抜ける空気の音だ。

「い、いやあっ！ こ、こんな音……聞かないでえっ！」

「ふふっ、恥ずかしがる事ないぞ。フルートなんかよりずっと綺麗な音色じゃないか」

大粒の涙を散らしながら泣き叫ぶボンデー少女の姿に興奮し、男はさらに激しく乙女の尻穴を責め始める。膝を屈伸させて尻穴に突き立てた男根を上下に振ったり、挿んだでん部を左右に揺らしながら引き寄せたりと、縦横無尽に動き回って直腸内をかき回す。

ぐにゅっぐちゅっぐりぐるぐりりゆるっ！

「で、でも……恥ずかしい……あっ！ あうんっ！」

我が身で無理矢理奇妙な音色を出させられる恥ずかしさに悶えながらも、綾香は直腸の中で固く膨らんだ一物がブルブルと震えるのを感じ取る。射精の瞬間が、刻一刻と迫って

いる合図だ。

「よおーしっ、出してやるぞ。お前の、デカイケツの中になあつ！」

柔肌に爪跡がつきそうならい力強く尻肉を握り締めて、ラストスパートをかける調教師。華奢な身体が天井まで放り上げられそうなほどの勢いで、ただひたすらに腰を前後に振る。

ぶじゅずるずりゆズルッ……。

「ひいつ！ お、お尻の中に、せーえき、だつ、出すのお？ まつ、まつてえ……」

「いいや、もう出す。出すぞおおおつつつつ！」

ブビュッ！ ブビュルルルルルツツツ……。

低い「ド」の音が断片的に響く中で、直腸の中へ熱湯を注がれたかのような熱さが一気に広がっていった。

「ああああんっ！ おつ、お尻の中が、熱い、熱い……」

ブシュッ！ ドパパパパパ——……。

同時に股間のスリットの力が抜けて、噴き出した大量の黄金水と共にバイブレーターが床に放り出される。はしたない水溜まりの上で、生きたウナギのように桃色の軟体がのたうち回った。

「はあっはあっはあっはあっ……」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**